
嘘

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘

【Nコード】

N9466P

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

目が見えない彼女は、僕の言葉を疑わない。そんな彼女に、一生君に嘘を吐かないと誓った僕。だが、その誓いは破られた。

―― 嘘を吐かないで。

それが、目の見えない彼女の唯一の願いだった。

正直なところ、僕は目の見えない人に対して、好奇心を持っていたんだと思う。勿論、同情もいくらかはあったにせよ、彼らがどんな風にこの便利で、それでいて不便なこともまた多い社会で生活しているのか、僕の興味の大半はそれで埋まっていた。

そして出会った彼女は、そんな僕の好奇心を大きく満たしてくれて、その上で当たり前前の事に気づかせてくれた。

目が見えないということを除けば、彼女は普通の大人の女性だったのだ。

大抵の事は、他人の手助けなど無くても難なくこなせるし、むしろ下手に手を出せば、それは彼女の邪魔をする事にもなりかねない。そんな風に自立心に富んだ彼女ではあるのだが、それでも時折、どうしても他人の善意を頼りにしなければならない事もある。

例えば、色だ。

その物の形状については触れることで、何とか大まかな姿形を思い浮かべる事は可能だろう。

彼女は多くの女性がそうであるように、ショッピングを楽しめるタイプの人間だ。そして、そんな彼女にとっては、目が見えないという事は何のハンデにもならなかった。

襟の形、ボタンの位置、スカートの長さに至るまで、彼女はそれを手で触れることで確認し、そして頭の中でその形を想像した。その後、彼女は僕の手を握る。

「紺色だよ。裾の刺繍は白い糸を使ってる」

形は気に入ったようだが、色は気に入らなかったらしい。

結局、彼女は同じデザインのベージュ色のスカートを選んだ。

彼女は僕の言葉を信じている。

もし僕が、その色を赤だとか黄色だとか言っても、彼女はそれを信じるだろう。

一度、僕はそれについて訊ねてみた。

「もし、僕が嘘を吐いてたらどうする？」

「嘘だって解らないもの。どうしようもないわ」

そこで一旦唇を閉ざし、彼女は小さく笑ってこう続ける。

「だから、嘘を吐かないでね」

「勿論だよ」

「私のことが嫌いになったら、ちゃんと行ってね。だって、私はあなたと一緒にいて、とても幸せなのに、横にいるあなたが無理をしているとしたら、とても悲しいわ。本当だったら、顔を見ればすぐに解ることなのに、私はあなたの言葉でしかそれを知ることが出来ないんだから」

仮に、僕が彼女の前で別の女性にキスをしたとしても、彼女はそれを知らないことは出来ない。

視覚を失った故の鋭敏な感覚で、もしかしたら何かの異変を感じるかもしれないが、僕が否定したら彼女はそれを信じる他はない。

少しでも僕の言葉に疑いを持てば、もう彼女は僕と一緒にいることは出来ないと考えるだろう。

一つ嘘を見抜けば、他の言葉も嘘に聞こえるに違いない。白と言った物が、本当は赤かもしれない。黄色だと言った物が、本当は黒かもしれない。そんな疑念を持ったまま、僕と一緒に居られないに決まっている。

だから僕は、決して彼女に嘘は吐かない。そして、彼女は僕の言う事を絶対に信じる。これは、二人が幸せになる為の最低限守られるべき誓いだった。

僕は、彼女の手には指輪を置いた。彼女の指がそのリングに触れる。その指が、彼女の誕生石であるルビーに触れたと同時に、僕は必死になって、そのルビーの色がどんなに綺麗な赤なのかを言葉で伝えた。

彼女は僕のそんな言葉を信じ、とても綺麗なリングだと言って、笑った。

「本当に良いの？ 私があなたのお嫁さんになっても」

「君に、一度だって嘘を吐いたことがあったかい？」

「……無い、よね？」

そう言って首を傾げる彼女に、見えないと知りながらも僕は笑みを浮かべて彼女の手からリングを取り上げ、それを彼女の左手の薬指に填めた。

「この先も、君には一生嘘を吐かないって誓うよ」

神様の前で一生の愛を誓う前に、僕は彼女にそう誓った。

その誓いが破られる日なんて、永遠に来ないだろうって思っていた。

だが、その日は来た。それも、案外早くにだ。

僕はその日、彼女にこんな嘘を吐いた。

「大丈夫だよ。ただ、ちょっと早産だっただろ？ だから保育器の中で、しばらく過ごさなきゃならないんだよ」

明るい病室で、僕は彼女にそんな嘘を吐いた。

彼女は僕の言葉を信じて、頷く。

「ねえ、あなたに似てる？」

「口はね。目の辺りは君にそっくりだ」

「本当に？」

「……僕が、嘘を吐いたことがあったかい？」

彼女は緩く首を振り、そして笑った。

「一緒に退院できるのかしら」

「赤ちゃんの方が、一足先に退院できるよ。君は、しばらく入院生活を送らなきゃね」

「一人で大丈夫？ 赤ちゃんの世話って大変よ」

「母さんに来てもらうよ。君は心配しないで、ちゃんと医者さんや看護師さん達の言うことを聞いて、早く身体を治すんだ。いいね？」

「ただの疲労でしょ？　なんだか、随分大げさじゃないかしら」
「出産したばかりだからね、大げさなぐらいがちょうど良いんだよ」
あの日、一生彼女に嘘を吐かないと誓った僕は、これから何ヶ月間かをずっとそんな風に彼女に嘘を吐き続けなければならぬ。
声さえ震わせなければ、僕が泣いていたって彼女には解らない。
僕の口から出る明るい言葉とは裏腹に、僕の顔にはもう作り笑いすら浮かんでない事も、彼女には解らない。
彼女は僕の嘘を信じて、親子三人の明るい未来を信じて、ただ穏やかな笑みを浮かべている。
僕は、彼女の目が見えないことを、初めて神に感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9466p/>

嘘

2011年1月4日22時25分発行